

P-306 肺癌併発肺炎の臨床的検討

市立秋田総合病院第3内科¹，男鹿市立総合病院内科²
○本間光信¹，佐野正明¹，三浦進一²

目的：肺癌患者では肺炎の併発がしばしば認められ，それが直接死因になる例も多く，予後を左右する因子の一つとして重要と考えられている。そこで，肺癌併発肺炎症例の種々の背景因子およびそれらと予後との関連を知ることを目的として検討を加えた。

対象と方法：昭和63年1月から平成4年6月までの原発性肺癌入院患者170名中，臨床的に肺炎を併発したと考えられる42名，49症例（同一患者が複数回肺炎を併発した場合は各エピソードを1症例とみなした。）を対象とし，性，年齢，組織型，臨床病期，肺炎発症前の癌化学療法や放射線治療の有無，肺炎発症時の白血球数，リンパ球数，および予後等について検討した。

結果：49症例の内訳は男性45例，女性4例で，平均年齢は66±11歳であった。組織型は扁平上皮癌が最も多く，49.0%で，臨床病期ではⅢ期以上の進行例が95.9%と大多数を占めた。起炎菌の検出率は32.7%で，MRSAを含む黄色ブドウ球菌や緑膿菌が比較的多く認められた。発症前に抗癌剤の投与を受けていた症例は51.0%，放射線治療を受けていた症例は28.6%認められた。肺炎治癒例は11例（22.4%）認められ，内8例は閉塞性肺炎で，さらにその中の6例は扁平上皮癌に併発したものであった。肺炎が直接死因となった例は23例（46.9%）で，Ⅳ期症例，発症前に癌化学療法や放射線治療を受けている例がともに17例認められた。又，肺炎病巣と癌の局在部位に関連のない例が多く，閉塞性肺炎例は少なかった。

P-307 肺癌による髄膜癌症例での白質脳症合併の検討

関東通信病院呼吸器センター

○萩原千恵子，善場元美，佐野光一，三島秀康，熊崎智司，高山俊政，平井三郎，石原照夫

目的：Methotrexate(MTX)髄注の関与が重要視されている白質脳症発症例の臨床的背景を明らかにする。

対象：1992年6月までに経験した5例（男性3例，女性2例），初診時平均年齢は53.6歳（45～67歳）。組織型は腺癌4例，小細胞癌1例で，髄膜癌症の診断は髄液細胞診，髄液生化学所見，臨床所見，画像所見を総合して行った。白質脳症の診断は脳CT，MRI所見によった。

結果：1) 肺癌治療開始後の生存期間は平均51.6カ月で，4例が3年以上の長期生存例であった。治療開始後髄膜癌症発症までの期間は平均36.1カ月(5～71カ月)で，髄膜癌症発症後の生存期間は平均14.8カ月(3～32カ月)と長く，2例が生中である。2) 髄膜癌症発症前の背景因子としては，4例が全身化療歴を有し，3例の脳転移例では50Gyの全脳照射を受けていた。4) 髄膜癌症の治療はMTX，Ara-C，PSL(各1回10mg)を週に1～2回髄注し，2例で40Gyの全脳照射を併用した。白質脳症発症までに投与されたMTXは平均97mg(50～140mg)で，髄膜癌症発症から白質脳症診断までの期間は平均11.8カ月(1～23カ月)で，3例が1，8，9カ月後に死亡した。5) 診断上臨床症状のみでは髄膜癌症の増悪との鑑別が困難で，2例の早期診断例ではMRIが有用であった。

結語：髄膜癌症の長期生存例では白質脳症は重篤な合併症と考えられ，早期発見には脳CT，MRIによる定期的な検索が必要である。

P-308 肺局所感染防御能に及ぼすMDP-Lys(L18)の影響について

浜松医科大学第二内科

○長谷川潤，佐藤篤彦，千田金吾

目的：muramyl-dipeptide(MDP)は細菌細胞壁の構造単位であり，感染防御能増大が注目されている。今回，MDPの化学合成物である，MDP-Lys(L18)の肺感染防御能に及ぼす影響について検討した。方法：DAラットにMDP-Lys(L18)を50μg，100μg，200μg/bodyそれぞれ皮下注射し，骨髓細胞数(BM)，末梢白血球数(PBLs)，分画及び気管支肺泡洗浄液細胞数(BAL cells)，分画さらにPBLsとBAL cellsの化学発光と白血球表面接着分子LFA-1α鎖の発現量を測定した。結果：

	BM	PBLs	BAL cells
総細胞数	↑	↑	↑↑
分画		好中球 → リンパ球 ↑	→
殺菌能(化学発光)		↑	↑↑
白血球表面接着分子(LFA-1α鎖)発現量		↑	→

→ 不変，↑，↑↑ 増加及び亢進

結語：LFA-1α鎖の発現は，PBLsで増加傾向を示すが，BAL cellsではほとんど発現せず，腹腔マクロファージ同様，肺マクロファージも発現しないと考えられた。一方，細胞数は，BM，PBLs，BAL cells共に増加を示し，さらにBAL cellsの化学発光はPBLsと比較して著明に亢進していた。これらの所見より，MDP-Lys(L18)によるBAL cellsにおける抗菌活性の亢進が示唆され，MDP-Lys(L18)が肺局所の感染防御能増大作用を持つ事が推察された。

P-309 胸壁原発悪性腫瘍の臨床的検討

徳島大学医学部第2外科

○福本泰三，宇山 正，先山正二，高橋敬治，住友正幸，門田康正

当科にて，1982年11月より1992年6月までに切除された胸壁原発悪性腫瘍5例について報告する。

胸壁原発悪性腫瘍の内訳は，骨肉腫2例(症例Ⅰ，Ⅱ)，悪性線維性組織球腫2例(症例Ⅲ，Ⅳ)，形質細胞腫1例(症例Ⅴ)の計5例であった。

男女比3：2，年齢42～75歳であった。原発部位は，Ⅰ左肋骨弓部，Ⅱ左第7肋骨，Ⅲ右背部，Ⅳ右鎖骨，Ⅴ胸骨であった。初回手術例は，Ⅱ・Ⅲ・Ⅴの3例で，他は局所再発・転移に対する切除例であった。胸壁再建には，Ⅰ自家腓骨・人工肋骨・マーレックスメッシュ，Ⅱシリコンプレート・マーレックスメッシュ・広背筋皮弁，Ⅲマーレックスメッシュ，Ⅴアクリルレジ板・マーレックスメッシュを使用した。局所再発は，Ⅲ・Ⅳに，遠隔転移はⅠに認められた。術後の補助療法は，ⅠADR・MTX，ⅢADR・CD DP，ⅣADR・CDDP・MMC・radiation 10Gy，ⅤMP療法を施行した。初回手術よりの経過は，Ⅰ17ヶ月後原病死，Ⅱ3ヶ月後健在，Ⅲ72ヶ月後原病死，Ⅳ18ヶ月後原病死，Ⅴ60ヶ月後健在，である。

一般に胸壁原発悪性腫瘍の手術成績は良好とは言えず，局所再発を繰り返し，予後不良である。術後の呼吸機能障害の許容範囲を十分考慮した上で，初回手術時より，できる限り広範囲の切除が望まれる。